

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

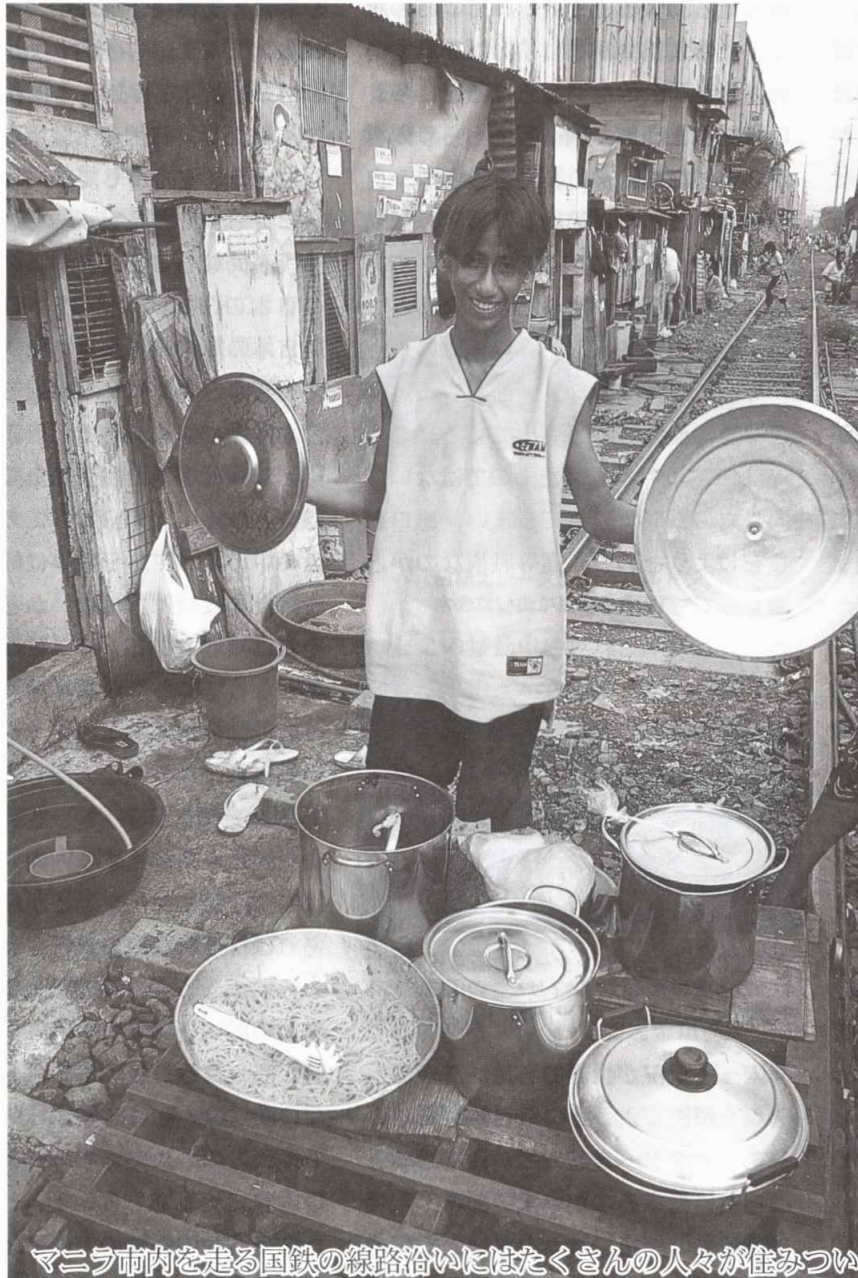
93

2004.12

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- スタディツアーレポート P. 3
- 研修生レポート P. 4-5
- 私たちが変わるための試み⑦ P. 7

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: http://www.kisweb.ne.jp/phd
定価：100円
郵便振替口座：財団法人ピー・エイチ・ディー協会
01110-6-29688



フィリピン、マニラ 撮影 FUJINO T.

マニラ市内を走る国鉄の線路沿いにはたくさんの人々が住みついている。

本来はそこは住宅地ではない。

他に住むところがないから複線の両脇と中央に小さな小屋を建てての生活だ。

二階建てもあるし、中を覗けば電化製品も。

めったに列車が来ない線路には、手製のトロッコに乗せた総菜売りがやってくる。

「今日はスパゲティがおすすめだよ。」

東西南北 問題解決 取組日記

ODAとどうつきあう

日本政府による国際協力、ODA（政府開発援助）が開始されて、今年で50周年だそうだ。戦後賠償から始まり、現在は年間、1兆円弱の予算が組まれている。

PHD協会ができた80年代初めは政府側にNGOに資金をまわす考えはほとんどなかったと思う。ところがODA批判がたびたびマスメディアで取り上げられる中で方向転換がなされていく。それまではNGOといえば反政府的な色合いが濃いと政府側は見ており、NGOの側も一部を除けば政府系資金の導入にためらいがあった。しかし欧米を見れば多くの政府系資金がNGOに流れている、だんだんと日本にもNGOが増えてきたし、社会的にも認知されているところまでできたということで80年代終わりから、政府からNGOへ資金をまわすことが始まっていった。外務省からは89年にNGO事業補助金、小規模無償資金協力が開始されていき、その流れの中で、厳密に言えば政府のお金ではないが、91年から始まった郵便局の国際ボランティア貯金が注目を集めた。今は低金利の中で額が減り、以前ほどの頼られ方ではないがインパクトは大きかった。これがNGOにとっても政府系の資金導入に対するアレルギーをなくしたと言ってもいいように思う。今ではいろいろなメニューで年間40億日程がNGOに支出されているという。

これらは資金確保に苦勞するNGOとしては、たいへんな助けとなるが、無条件で歓迎できるかといえばそこは難しい。政府系でなくとも外部助成に多くを頼ると、それが得られない場合に、活動が成り立たないようにしてしまう。一度もらうと、続けてもらわないと続かなくなりがち。一種の麻薬

のようなものと言われるのはそこにも理由がある。また助成を受ける際に、相手側の条件に合わせることで、自らの方針、方向性を曲げてしまうことが怖い。さらに、それが公的なお金である場合には、その内容がまさに資金を提供してくれた元の人たち（納税者）に対して、納得してもらえぬ公益者性を持っているのが問われる。限られた範囲で、その団体の趣旨に賛同する人たちによる支援で行っているのなら、その人たちが納得すればそれでいい。しかし公的なお金となると、多くの人たちに理解、納得してもらい内容が必要となってくる。もうひとつ、自前のお金であれば節約して残す、無駄に使わないようにすることが当然である。ところが外からのお金となると、期間内に使い切る、予算いっぱい消化することが大切となり、節約する意識とは逆に流れることも出てくる。これではODA批判を言えたものではない。同じ穴のムジナにしてしまい、悪口封じをしようという、高等戦術なのかと勘ぐってもしまう。



この夏はJICA兵庫センターの教師海外派遣プログラムを引き受け、フィリピンの山村、都市を訪問した。（マニラ市内線路沿いのスラム）

困った状況が世界の各地にあって、それを解決しようという目的があり、そこでセクターを越えて一致できるところで協働するのが本来である。現場での活動の優勢にはセクターとしての違いがあり、プログラムの内容そのものや、担当者の力量が決めることになることが多い。そうなるとう官民双方の利点を生かし、欠点を補うという協力がひとつの可能性となる。それがNGOの中にある、すぐ動ける、小回りがきく、コストが少なくてやれる、草の根の人々

により近いといった点であろう。しかしこれがODAの中にある基本的な考え方や構造に安易に組み込まれる補完的な役割にいつもとどまるのであれば、気をつけなければならない。NGOの本来の意味である非政府という立場を改めて思い起こす必要があるだろう。政府がまさに一人一人の市民の気持ちや考えを代弁し、コトを行ってくれば問題は少ない。しかしある特定の層や考え方を偏重するものであれば、それに対して「非」を打ち出すことがNGOの役割でもある。世界に平和をつくりだし、貧困や不健康な状態に苦しむ人々をなくしていく目標では一致しても、それを実現していく方法、手段が異なることがある。必ずしも今の日本のODAの目指すものが、多くの日本の草の根の人々の気持ちを表しているかといえば疑問が残る。いろいろな行動を決めるには、直観だけでなく、周到な準備・調査の上での判断が必要となる。だからすべての人々が、世の中のすべての出来事に興味・関心を持たなければならないかと言えば、それは無理である。そこには分担が必要となってくる。政府の中にもそれなりの役割分担があるのだろうが、市民の側にも、取り組む人たちの集まりがある。それがNGOだと思う。それが自己満足を目指す内向きのものでなく、社会に対して働きかけるものであれば、それなりの責任や専門性が求められる。ここに各々のNGOが政府との関係をどうもつかにしても姿勢が問われることになる。

ODAは税金がモトであり、私たちも納税者の一人である。できるだけいい内容で使ってもらいたいと思う。私たちの活動の経験の中に果たせる役割があるのなら、批判的な姿勢を忘れずに担ってほしいのではないかと考え、今はいくつかの政府系のプログラムとの協働も始めている。

ODAの方向性にオルタナティブ（もうひとつの）を示せる協働であれば、意味があると思う。藤野達也

第10回フィリピン スタディツアーレポート

▼真柴朝子さん（農家、兵庫県南光町）

PHDの研修生を受け入れて早いもので7年経ち、この子達の村での生活を見てみたいとの思いで参加しました。

ガバルドンの田んぼは5アールぐらいの四角い大きさに区切られていて仕事はしやすそうでした。多収さえ望まなかったら、土着菌を稲わら、草などと混ぜ合わせるという堆肥ができるので有機農業がきっと成功すると思います。

稲の改良にも取り組んでいるらしく30種類程の収穫前の稲も見ましたが、どれも良く出来ていなかったです。色んなものに挑戦することも大事ですが、その土地に合った品種が一番農業を使わずに良く出来るように思います。今日本でも遺伝子組み換えの大豆が問題になっていますが、色んな野菜も同じ事がおきているので、フィリピンだけにしかないものを大切にしたいと思っています。日本はアメリカの言うとおりになってしまうのですが、今のガバルドンだったらまだ間に合うと思います。

▼日野ひとみさん（学生、大阪府堺市）

マニラでもガバルドンでも同じ向う心や連帯感を感じました。そこに住む人たちが支え合いながら同じ目的を持って頑張る姿は、温かいとも感じ、大学生になってすっかりぬるま湯生活を送っている私にとって目標を持って何かをすることは新鮮というか、今の自分の生活にはないのだと気付きました。

▼梅田佐江子さん（教師、奈良県御所市）

（村の）どの子供たちも実に良く家の手伝いをし、よく遊ぶ。おとなは子供に媚びることをなく、子供は家の手伝いをするのが当然というふうで、ありがたうと言っている様子は一度も目しなかった。朝食は生みたて卵の卵焼き

や採れたて野菜のおかず、毎回炊きたてご飯。残り物を食べたり、冷凍パックのチンはありえない。冷蔵庫のないおかげで、こんなに豊か＝新鮮な食生活ができることを初めて知った。

また一方、携帯電話、テレビ、DVD等の普及はハイスピードで、子供たちがテレビに釘付けになっている姿を見るにつけ、悪魔が忍び寄っているように感じた。しかし電気のない生活をユートピアのようだと思うのはこちらの身勝手な感傷に過ぎないだろう。



田植えシーズンのガバルドン。木のない山が周囲を取り巻く。

バスの移動中に見た、木が伐採され尽くした山々からなる、延々と続く不自然な景色。安く海外の木材を買いあさるブローカーが作り出した景色である。国内林業は衰退の一途を迎える日本が、この景色を作り出したという。

この旅行中に改めて確認したことは、地球上のごく一部の人間が世界を牛耳り、その一部の人間もまた、自分たちが破壊に向かっていくことを知りつつ、止めることができないという事。人間の本能は行きつくところまで行きつくしかないのかもしれない。

が、今回の旅行では、希望につながる予感を感じた。今、自分がどんな生活を心がけるか、小さいことの積み重ねがいかに大切か、そしてそれが、いつか力強く光を放つ光明になっていく予感を。

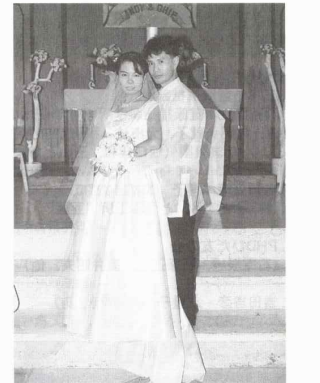
▼西尾宣美さん（看護師、広島県廿日市市）

当初、村に行ったら保健や医療の状

態を見たいと思っていた。しかし、実際に行ってみると、ただ、そこで生活してみようということ自体が充分満足した経験となった。生活することに関して意識することがあまりなかったので、人の基本を探せたようでよかったと思う。

国際協力もこれがいい！という答えは一つではないのだろう、と感じた。だからといって、困っている人のところに訪問し話しも聞いたのに、個人の経験としてそのまましておくのは、訪問に協力して下さった方に申し訳ないような気がする。しかし、まだ、どうしたらいいのかわかりしない状況にある。まずは、身近な人に、「フィリピンって近い国なんよ」というところからでも始めたいと思う。

アンディさんが結婚しました!!



昨年度のフィリピンからの研修生、アンディさんが5月15日に結婚しました。来日中にはお相手がいることは白状していましたが、「結婚は1~2年先です」などと周囲を煙に巻いていた中での電撃結婚でした。お相手は“MASIPAG”という有機農業の普及を目指しているNGOのスタッフ。現在妊娠5ヵ月です。

22期生

7月下旬～10月上旬

猛暑に加えて、次々と直撃する台風により、研修先の農家にもかなりの被害がひろがっています。ハイディさんとソーウィンさんは壊れたビニールハウスや建物の後片付けなどを経験、改めて自然が相手である農業という仕事の厳しさを痛感しています。(納堂邦弘)

研修生レポート

アフリタ (通称リタ) さん

(インドネシア、女性、19才)

一保健衛生・保育・洋裁研修一

- くらふと・ぎやらりー多田 (兵庫県芦屋市)
- 高橋武子 (三木市)
- 福永隆昭・就子 (滞在/神戸市)
- 篠山市保健福祉部健康課 (篠山市)
- 山岸輝雄・永子 (滞在/同市)
- ささやま保育園 (同市)
- 小嶋英毅 (滞在/同市)
- 田辺美起枝 (滞在/同市)
- 高砂市福祉部健康課
- 兵庫県高砂健康福祉事務所 (高砂市)
- 船田昭彦・かよ子 (滞在/同市)
- 神吉道子 (アレンジ/滞在/同市)
- くらふと・ぎやらりー多田 (芦屋市)

<敬称略>

今まで一度も洋裁をしたことがなかったリタさん。日本で初めてミシンをかけた時にはあまりのスピードにびっくりしたそうです。「恐くて足を離すことができます、ますます踏み込んでしまった」というのも今は笑い話にできるくらい上手になってきました。

これまでにスカート、ブラウス、ワ

ンピース、ズボンの作り方を一通り習いました。タベ村からの研修生の洋裁研修をずっと見てもらっている「くらふと・ぎやらりー多田」の犬塚先生によると「ミミさん(01年度)やエリさん(02年度)と比べて、特に器用というわけではないけれど、わからないことを流さずの一つ一つ確認する姿勢がいい。急がば回れ、という感じで最後にはかなり上手になるのでは」とのこと。リタさんは、「まだ最初から最後まで1人ではできないです。襟やファスナーをつけるのが特に苦手。まだまだ研修が足りない」と話しています。

「日本語が難しいです」と言いながら、保健衛生研修にも積極的に取り組んでいます。村では、中学を出て16才の頃からボシアンドゥ(月1回町から医



離乳食の実習(篠山市)

が来て行われる5才以下の乳幼児健診)にボランティアとして関わっていましたが、食品の栄養素や離乳食、家族計画などについて学んだことはほとんどありませんでした。「村では離乳食といっても、ごはんをつぶしてあげるだけ。少し大きくなったら、ほとんど親と同じものをあげます。塩分や油が多すぎたり、小さな子どもに甘いお菓子をあげたりと問題がたくさんある」ことがわかったようです。

ハイディ・マルセロ・マリアーノさん

(フィリピン、女性、24才)

一保健衛生・農業研修一

- 三木市健康福祉部健康課
- 兵庫県三木健康福祉事務所 (兵庫県三木市)
- 福永隆昭・就子、光田弘・和子 (滞在/神戸市)
- のりたま農園 (坂口典和、玉山ともよ) (篠山市)
- 金田克彦・博子 (京都府綾部市)
- (株)尾崎食品、とうふ工房「亜蔵」 (兵庫県神戸市)
- PHDひだ友の会 (石原英雄、石原正弘、直井昭夫、他) (岐阜県高山市)
- 吉田吉彦・八重子 (兵庫県水上町)

<敬称略>



保育所の子どもたちとイモ掘り(水上町)

前号でもお伝えしたとおり、引き続き、農産物加工に力を入れて研修を続けています。のりたま農園では、トマトの水煮の缶詰や梅干し、金田さんの所では自家製の醤油や味噌、高山では、マヨネーズ、かぼちゃコロッケ等、様々な食材に関する知識やその調理、加工法を学んでいます。

そして、アンディさん(03年度)が中心となって現地で商品化を目指している有機大豆による豆腐・豆乳作り。毎年お世話になっている尾崎さんのところでハイディさんも夜11時から朝5時まで工場での製造工程を見学したり、台所で何度も繰り返し自分で豆腐を作る等、みっちり研修を行いました。さらに豆腐からはがんもどき、ドーナツ、ティラミス、おか

腐作りには全然ゴミ(無駄)がない!」と感心していました。

三木市では保健衛生や栄養について学んだのですが、その時の知識を生かして「フィリピンでは肉は高くてもあまり食べることができないけれど、豆腐などを食べることでたんぱく質をカバーできる」と大豆の魅力を再確認したようでした。

また、研修先の多くの有機農家の方々が消費者の人たちと顔の見える関係を築きながら自分の農産物を持っていることにも強い関心を持っています。氷上町では、吉田さんの作る農作物や豚肉を昼食に使っている西宮市の「はらっぱ保育所」の保育士さんや子どもたちが週末に農作業や豚肉の仕分けを手伝う姿を見て、「私の村でもこんなことができたらなー」と夢を膨らませていました。

ソーウィンさん(ビルマ、男性、35才)

一農業研修一

- 一色作郎・富士夫 (兵庫県島岡町)
- ふえろう村塾 (小野市)
- 真柴三幸・朝子 (南光町)
- 大森昌也・ケント (和田山町)
- 渋谷富喜男・広子 (神戸市)
- 中川克敏・美佐子 (島根県川本町)
- 白浜松喜・八重子 (島根県) 日高久志 (アレンジ/邑南町)

<敬称略>

真柴さんの所で研修中に台風が直撃。牛舎の屋根が吹き飛び50m程離れた国道のど真ん中に落ちるのを目撃したソーウィンさん、急いで真柴さんに知らせ、嵐の中必死に撤去作業を行いました。幸い怪我や事故にはつながりませんでした。台風の恐ろしさを肌で感じるようになりました。

通過後も各地でむちゃくちゃに倒れた稲や収穫出来なかった野菜を見て、「大変…。農業は大変…。」やはり初

期投資はできるだけ抑えて、多品目を少しずつ栽培する有機農業の大切さを痛感したようでした。

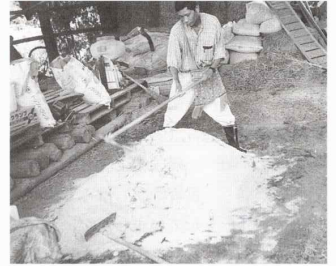
一色さん、大森さん、白浜さん等の所で、ビニールではなく稲わらや草を野菜の畝間に敷くことで雑草が生えてこないようにしたり、土の水分を保つたりすることができるのを見たソーウィンさんは、「私の村では稲のわらは牛のエサ。残りはゴミとして燃やしています。でも、こうやって使えることがわかり嬉しいです。これならお金もかからないし、村ですぐにできます」と話しています。

また、真柴さんには土着菌の取り方や使い方を教えてもらいました。山の中(特に竹やぶ)や田んぼには良い働きをしてくれる菌がたくさんいて、それを上手に集めて、肥料や家畜のえさに混ぜて使うと、良質の有機肥料やえさができることを学びました。EM菌という日本で商品化された市販の物がビルマでも最近売られていますが、お

金を出してわざわざ買わなくても身近な自然の中に同じ効果のあるものが隠れていることに気づくことができ、喜んでいました。



竹やぶから土着菌を取り、ボカシ肥料を作る(南光町)



第9期国内研修生

佐藤栄利子さん



和歌山県の公立高校で講師として6年間勤めてきました。職場を離れる時「大切なもの探しをしよう」ということを決め、見つけたものを大切にできるようにノートに書き留めることに

しています。例えば、家族、言葉にすること、変身すること、肩こりを解消すること、海に行くこと、ユーモアのセンス、愛犬ハナコ、等々…。そんな中、基本である「温かな人とのつながり」も見つけました。1人でできることには限りがありますが、思いがけず誰かが手を差し伸べてくれた時に、ホワッという温かさと共に爽やかな感謝の気持ちが生まれ、これが「人とのつながり」の第一歩だと思っています。研修を始めて間もないですが、PHDにはたくさんの第一歩があることを実感しています。私が国内研修生に応募したのも、年末年始にかけて参加したタイへのスタディツアーがきっかけでした。その時の「つながり」も大きく豊かなものに成長しています。たくさんのお話を学び気付かせていただくのと同時に、非力ながら少しでもお役に立つことがあれば、という思いです。半年間よろしく申し上げます。

共通研修

- 口腔衛生研修(明石協同歯科、兵庫県明石市)

研修生は歯がいい!? -その4-

(インドネシア・タベ村編)

PHDレターの89~91号で取り上げてきた、タベ村で虫歯が多い要因の残りとしては、避妊薬の日常的な使用により女性ホルモンが抑えられ、カルシウムの摂取が妨げられていることも考えられます。避妊が女性による受身的な位置づけにあるという文化的背景も大きいですが、日本では見られない強い効果の持続する薬を若いうちから服用しているこの影響は少なくないでしょう。

そうこうしているうちに、早いもので9月には22期生の1回目の口腔衛生研修が行われました。まずは自分の歯や歯ぐきの状態を知ることや歯みがきの正しいやり方等について学びました。心配していたタベ村出身のアフリタさんは、虫歯は小さめのものが3本あっただけでしたが、親しらずが4本とも生えずに歯茎の中に倒れてしまっている状態でした。これを見た黒田先生からは「柔らかい食べ物が多くなっているのではないかと。同世代の村人たちにも広がっているはず」と新たな問題点を指摘されました。

帰国研修生短信 (インドネシア)

パシルバルー

▼アリ・ムルティムさん (87年度)
漁業と漁業協同組合の仕事で忙しくしています。パシルバルーでは、インドネシア政府の支援による新しい漁港と製氷工場の建設が動き出しています。

▼サムスアリさん (90年度)

10~12人で船に乗り込み漁に出ています。船外機が古くなり不調。高価なものなので、そう簡単には買い換えることができません。

▼ハスマヤニさん (92年度)

帰国後に立ち上げた保育園がしばらく中断していましたが、今年6月に再開しました。旧村役場を園舎として利用し、月~土曜日の朝8時~11時、5歳の子どもが25人通っています。また、日曜日には婦人会や乳幼児健

診プログラムを行っています。

バタン

▼ラディア・エリタさん (94年度)
今年1月に女の子が生まれました。元気そうな姿を見せてくれました。

タバ

▼ダスウィルさん (99年度)
ダスウィルさんの農業グループのメンバーは23人から60人に増えました。郡から助成金を得て、グループで野菜づくりのために使っています。農業ではなく、草木などから抽出した液を薬として使っています。田んぼではタニシによる被害が出たり、畑では唐辛子の実や葉が枯れる病気が出ているようで、試行錯誤中です。

▼アフダールさん (00年度)

村長をしているので、訪問時は9月下旬の大統領選挙を控え、選挙管理の仕事で大忙しでした。

▼アルウィさん (01年度)

農業グループでは、月に2回ミーティングをしています。鶏は50羽飼っており、家の近くの田んぼを有機農業の試験田として使っています。唐辛子、サトウキビ、玉ネギを出荷用に、米、ナス、エンサイを自給用に使っています。

▼ミミさん (02年度) と

▼エルリナさん (03年度)

5歳以下の乳幼児健診のプログラムに継続的に関わっています。また、ミミさんが立ち上げた高齢者のための保健プログラムも引き続き行っており、月1回血圧や体重を計り、食べ物の指導をしています。高血圧の人が多いのですが、少しずつ血圧指導の成果も出てきているようです。今後は運動の指導もしていきたいとのこと。また、小学校では、看護師とともに、歯磨きについての話しており、今後も続けていきたいそうです。

* * * * *

8月21日~22日 第14期林業体験合宿 ~下草刈り~ 19名が参加しました

「下草刈り」の危機!?

実は実施前に「今回の林業体験合宿では下草刈りができないかもしれない」という話があった。それは日本林業が抱える問題とつながっている。そもそも下草刈りとは、植林した木がまだ小さい時に他の草木の方が大きくなって、スギやヒノキなどに日光が当たらなく

なると困るので草を刈るもの。ところが現在は育った木を切って売ることができないので、苗木を植えることもできない。つまり草が生えず草刈りの必要がない。そのくらい林業のサイクルが変化してしまっている。

新しい流れを作る

夜の学習会では、新しい林業の流れとこれまでのやり方との違いが浮彫りになった。今回は3者から話を伺った。長年このプログラムに協力してくださっている大山振興会のメンバーは高齢化していることもあってか、「昔は(商人が)山に来て買ってくれた」感覚から抜け出せない現状の話があり、ウータン・森と生活を考える会事務局長の

西岡さんからは、熱帯の違法伐採・密輸された木が日本のホームセンターなどで販売されている事実を販売会社に問い詰め、仕入れが中止されることになったとの報告を聞いた。一級建築士でもある(有)ウッズの安田さんは「以前は建材の出もとのことは頭になかったが、それはおかしいんじゃないか」と、木材コーディネーターの能口さんと共に加古川流域森林資源活用検討協議会を立ち上げた話をされた。

山に関わる人だけががんばっても変わらない。大事なことは、消費者である私たちが日本の材を使おうという意識を持つこと。町の人間が変われば山も変わる。

寺田栄



ウータン・森と生活を考える会の西岡さん

私たちが変わるための試み ⑦

「自分なりの国際協力を求めて 水俣へ」

編集部 (以下編) : 国内研修生の期間が終わって、どうして水俣に行くことになったんですか?

坂西 (以下坂) : PHD協会の西日本研修旅行がきっかけですね。それまでは水俣には全く興味がなかった。「水俣病のミナマタ」というぐらいの認識でした。どっちかと言うと暗いイメージ。でも実際に訪れてみると元気で活力のある人と場があって、自然、特に海の見しさには驚きました。その時に水俣病患者の人にも出会うことができ、水俣の持つ「熱」に強く惹かれたんです。

編 : じゃあその時に水俣に行こうと?

坂 : たまたま職員募集をしていたんです。でもその時はアジアに長期で行く計画があったので、どうしようか迷いながら研修旅行を続けていました。

編 : アジアで何をしようと思っていたのですか?

坂 : 農村で生活することで、生活そのものを学びたかったんです。そしてその上で国際協力とはどういうものか考えてみたいと思っていました。水俣を訪れた後は九州を北上して行ったんですが、水俣や筑豊などでの研修以外にも各地でPHDを支援してくれている人達との交流会があったんですね。どの交流会でも心のこもった手料理で迎えてくれ、その地域の人達が集まってくれていました。感激しましたね。そういった素敵な人達との出会いを通して、自分の中での考え方が少しずつ変わっていったんです。今までは国際協力って海外に出かけて何かをすることばかりをイメージしていましたが、それだけじゃない。国内でもできることはあるし、むしろこういった幸せな出会いを積み重ねていくことが、最終的に平和や健康につながるような気がしました。研修旅行で出会った人達のように、出会った人と喜びと幸せを分かち合える人になりたいと思うようになっていったんです。

編 : それで、アジアに行くことをやめて、国内に活動拠点を置くことにしたのですか?

坂 : そうですね。今までアジアの人達と物質的な豊かさの弊害をどうやって共有できるのだろうか?と悩んでいました。伝えたいと思う一方で、自分はそういった物質的に豊かな生活にドップリと浸かっている。でも水俣に行って水俣病を知り、水俣を体験して、強い衝撃を受けました。自分達が享受している豊かさを創るために犠牲になった人達がいる。比喩じゃなくて、確かに「ここ」に居るんです。そういう日本の経済発展の裏側をよく知らずに豊かさの弊害なんて言っていたんです。自分が知っているのは豊かさの結果だけ、その過程を全く知らなかった。アジアの農村は今その過程にある。だから過程の弊害の方が良く伝わるんです。だから水俣で学び、これからどうやっていけばいいのか?水俣を訪れてくれる人やアジアの人達とも一緒に考えていきたい。僕が感じていた葛藤とは、自分の言葉を持っていないこと。豊かな生活体験を持つアジアの人と語り合う言葉を発することができない自分の問題だったんです。だから水俣で傷を背負わされた人達から膝を折って学ぶことから始めたい、と思ったんですね。「私の水俣」を伝えるために。

編 : いろいろな思いがあって、水俣病センター相思社にたどりついたんですね。今はどんな仕事をしているのですか?

坂 : パソコンにとらめっこですね。基本的な仕事は水俣病関係資料のデータベース化なんです。「なんでこんな自然いっぱいいるところでこんな仕事を」と思うこともありますが、実は大切な仕事なんです(笑)。水俣病の資料を整理保存するというだけでも歴史的な事業ですが、単にそれだけでなくもやい直しのためでもあるんです。

編 : 「もやい直し」というと?

編 : え?21分別ですか。大変そうですね。

編 : 「もやい直し」というと?

水俣病センター相思社 坂西卓郎さん



昨年の国内研修生だった坂西さん。現在は私たちが西日本研修旅行で毎年訪れる、「水俣病センター相思社」で働いています。水俣にたどり着くまでのいろんな思い、水俣での生活、そして、これからについてインタビューしました。

坂 : もやう= (船と船を) 結ぶ、という言葉から来ています。水俣では、ぼらぼらになった人間関係の修復や創造という意味で使われます。というも「水俣病の歴史は対立の歴史」と言われています。故に相思社の資料は「患者側」しか使うことが許されなかった。今なお水俣で患者に対する差別は無くなってはいないんです。患者が地域で患者ということを感じずに、差別されずに生きていけるように、まず相思社が持っている資料を公開することで対立の図式を変えていきたい。資料の保存と整理にはそういう意味があるんです。他にも相思社では「水俣病を伝える」ために水俣まち案内やグリーンツアーリズム、水俣病患者の聞き取りなどを行っています。

編 : 神戸から水俣に移って、生活環境がガラッと変わったと思うのですが。

坂 : やっぱり戸惑ったのは、ゴミの分別ですね。なんとといっても21分別もあるんですよ。例えば、お茶のティーバッグやボールペンを捨てる時なんか大変。色々分解していかないといけない。面倒ですよ、きちんと分けて出さないと回収してくれないし。

編 : え?21分別ですか。大変そうですね。



ゴミの21分別収集 (水俣市)

続きは次号でご紹介します。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2004年 8月	117件	1,306,413円
9月	83件	2,636,834円
200件		3,943,247円

上記の通り、多くの皆様よりご浄財を頂きました。心より感謝申し上げます。必ずしも良いとは言えない経済情勢の中、年末募金を迎えます。あらためましてご支援をお願いいたします。

◆プリペイドカード収集について

当会で集めるプリペイドカードの種類を限定させていただくこととなりました。今までお送りいただいていたプリペイドカードの中で、病院のテレビ

カード、駐車場カード、電車やバスの回数券は業者に送っても、換金できなくなりました。

お手数をおかけしますが、当会へお送りいただく前に、上記カードを取り除いていただけると幸いです。よろしくお願い致します。

◆3月中旬、パプア・ニューギニア

スタディツアー参加者募集!

研修生の村を訪ね、村の生活体験をする旅にあなたもでかけませんか? 研修生の村でのホームステイもあります。詳細はまだ決定していませんが、パンフレットができあがり次第、お届け致しますので、ぜひ、お問合せ下さい。

■ 年賀状やハガキを集めています! ■

年賀状はもう書かれましたでしょうか? 書き損じた年賀状がありましたら、ぜひPHD協会までお送り下さい。郵便局で新しいハガキや切手に交換し、日々の領収書や物品の郵送、行事の案内等に活用させていただいています。昨年度は皆様から70万円相当の年賀状やハガキをいただきました。ありがとうございます。ご協力、よろしくお願い致します。

第23期生のホストファミリー募集

2005年4月に来日する研修生3名の滞在家庭を募集しています。



ロナルドさん
(フィリピン・男性・26歳)



マスラルさん
(インドネシア・男性・30歳)



トゥンティンティさん
(ビルマ・男性・33歳)

期間: 2005年4月から1年間。来日後最初の6週間は毎日。以降、月平均7日程度。

希望滞在場所: 神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。

経費: 当会規程の食費、滞在費をお支払いします。

詳しくは当会までお問合せ下さい。

○月×日のPHD協会

<休みの過ごし方いろいろ>

職員 古本 広島、江田島への帰省の際、切符を落として最終新幹線に乗り損ねたり、船を待ってた港が実は台風で利用できず、苦勞の末に帰り着く。

職員 寺田 最近再開したスキューバダイビング。水中での浮遊感がたまらないそうで、決して海女さんに転職するための訓練ではないとのこと。

職員 芳田 岡山の両親宅でも家庭菜園に精をだす。耕して、油かすを肥料としてまいたら、狸がきて引っかきまわす。熊と違い、出くわしても大丈夫。

職員 佐々木 バンコクの寺にあるマッサージに通いつめる。1時間半を日に2回。1年の疲れを癒すというより、この快樂のために働いているらしい。

国内研修生 佐藤 仲間5人と2度目の富士山。22時から歩き始め4時間で山頂へ。日の出までの待ち時間、山小屋は高いので、凍えながら外で待つ。

職員 納堂 7ヵ月の子を連れて、琵琶湖畔へお泊りに。心配に反して、ご機嫌で、家ではぐずるお風呂でスヤスヤ。子ども中心にまわるお休み。

職員 藤野 手近な気分転換でCD屋へ。今日はジャズの新譜がイマイチなので、大昔、高校生の頃買えなかったロックの再発を3枚。昔の半額感覚。

PHD協会は特定公益増進法人として認定を得ていますので、個人にも、法人にもご寄附に対する免税の特典があります。

当会へのご寄附は免税の対象になります。